

## 正覚寺〈しょうがくじ〉の墓碑〈ぼひ〉（三田市三田うら町）

三田の大名九鬼〈だいまょうくき〉の殿〈との〉さんは、今から三百六十年ほど前に、三重県鳥羽〈とば〉から三田にお国替〈くにがえ〉になりました。九鬼というのは、熊野の九鬼浦から出た九鬼水軍〈すいぐん〉であります。豊臣秀吉が朝鮮〈ちょうせん〉を討ったとき日本水軍として名をあげました。その九鬼氏が、鳥羽〈とば〉に域をかまえて志摩〈しま〉の国一国を領〈りょう〉していたが、寛永〈かんえい〉十年徳川家光の時に、この三田へ国替になって来たのであります。

大名のお国替というのは大そうなことで、多くの日数〈にっすう〉とたくさんの費用〈ひよう〉とを要〈よう〉しました。殿さんの陣屋〈じんや〉の改装〈かいそう〉、侍屋敷〈さむらいやしき〉の割当〈わりあて〉、家財〈かざい〉、家具〈かぐ〉の運搬〈うんぱん〉の手配〈てくばり〉、さては寺を建てねばならず、お墓もそちらへ移さねばならない。お坊さんもつれて行かねばならない。毎日毎日何十台という大八車〈だいはちぐるま〉が、道中一泊〈どうちゅういっぱく〉して鈴鹿〈すずか〉の峠〈とうげ〉を越えて来たのであります。

九鬼一族の石碑を何台か宰領〈さいりょう〉がついて、三田心月院〈しんげついん〉という寺に運ばれたが、最後の二台が道に迷〈まよ〉っておくれました。この車が横山峠まで来た時、日はとつぷりと暮〈く〉れて、くらやみの底〈そこ〉にわずかに灯〈ひ〉が見えており、三田の街の灯でありました。

つかれた人足は、道行く人に三田ときいて勇氣〈ゆうき〉が出てきました。お寺はうら町にあるときいてさらに元気〈げんき〉を出して、もう一息だと峠を下りました。うら町正覚寺にたどりついて山門〈さんもん〉をくぐりました。

実はこの石碑は、西山の心月院〈しんげついん〉という寺に搬〈はこ〉ばなければならなかったのであります。

正覚寺では、酒さかなを出して人足をねぎらいました。心月院ではいつまでたっても来ないので、さがして見ると正覚寺に運ばれていることがわかりました。

お城からは、宰領を正覚寺へやって、その石碑をとりもどすことになりました。宰領が、正覚寺へ行っていろいろと話をしたが、坊さんは大へん腹を立てておこりました。

「縁〈えん〉があってこの寺にこられた石碑である。どうしてもこの石碑をもちかえりたいのなら、私の首をはねてからもちかえれ。」

と、山門にあぐらをかいて車を通しませんでした。

それから、家老〈かろう〉がきました。どうしても坊さんはいうことをききませんでした。

この二基〈にき〉の墓石〈ぼせき〉だけは、正覚寺墓地にまつられて今日〈こんにち〉におよんでいます。

心月院で九鬼家の法要〈ほうよう〉があると、その前日家老はこの正覚寺にお参りをするようになっていました。

この墓石というのは、お殿さん九鬼久隆の母御〈ははご〉などのものであります。

むかしはえらい坊さんがおったものではありませんか。

